

# 「千曲川」の方言チヨーマ考

馬 瀬 良 雄

## 一 はじめに

水の流れに 花びらを

そつと浮かべて 泣いた人

ご存じ「千曲川」の歌い出しの部分である。三番では、

一人たどれば 草笛の

音ねいろ哀かなしき 千曲川

と、川の名も歌われる。

この川はまた、島崎藤村の『落梅集』（一九〇二）所収の「小諸なる古城のほとり」や「千曲川旅情のうた」、さらには小品集『千曲川のスケッチ』（一九二二）によって、世に知られる。また、小学唱歌「川中島」（二八九五）の中でも「筑摩ちくまの川は波あらし」と歌われている。「お手玉」や「せっせっせ」の遊び歌として歌われたこの

歌は、少し年配の方ならご存じであろう。

ここで『広辞苑 第五版』（一九九八）の「千曲川」の説明を、次に引用する。

長野県北東部を流れる川。甲武信岳（たけふし）に発源し、上田盆

地から長野盆地に入り、長野市で犀川（がむい）と合流、なお北

上して新潟県に入り信濃川となる。長さ二二四キロメートル。

この千曲川は、かつては現在とは比較にならないくらい、地域の人たちの生活と密接に結びついていた。田畑をうるおし、川船は諸物資を運ぶとともに諸文化を伝えた。子供たちもこの川で水浴びをし、ヨートリ（魚取り）をし、この川の恵みの中で成長した。千曲川は彼らにとってまさに「母なる川」であった。

あとで分布図で見ていただくが、この川をチヨーマと呼ぶ地域がある。本稿では、「千曲川」の方言、チヨーマを中心に述べる。

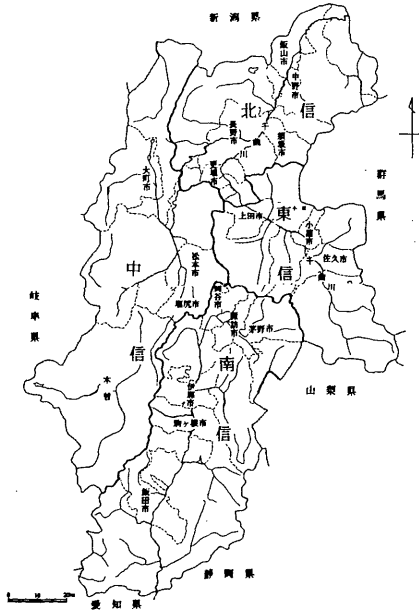


図1 長野県図

本題に入る前に、本稿をまとめるに至った動機を少し述べておく。古い話になって恐縮だが、十年以上前、一九八八年NHK長野ラジオ第一放送で長野県の方言について話した。その中で「千曲川」の方言、チョーマも短い時間取り上げた。それを聞いた方から、その放送を文字化して地域の雑誌に載せたいという希望が寄せられ、「諾」の返事をした。放送から一年近く経ってその雑誌が届いた。誌名を見て驚いた。なんと「ちようま」というのだ。発行元は、長野県更埴市にある「更埴郷土を知る会」である。そこにはそれまで同誌に載ったチョーマの語源等についての論考も同封されていた。チョーマの語源をめぐっては、その後も論説が同誌に載り、送っ

ていた。ただ、私の放送内容についての多少の誤解もあるように見受けられた。短い時間であったので、意の尽くせぬところもあつた。私は自分の考えを活字にきちんとまとめておかなくてはならないと思いつつも、それを先延ばしにしていた。

NHKは西暦二〇〇〇年、放送七十五周年を迎えるに当たり、『記録事業「ふるさと日本のことば」』を計画し、一九九九年四月からその実施に入った。そしてNHK長野では事業の一環として「二十世紀に伝えたい信州のことば」を広く募集した。一カ月ほどで二〇〇〇通が寄せられたという。そしてその中に、「千曲川」の方言、チョーマが何通かあつた。

チョーマについて書いておくべきだという思いに再び駆られ、本誌にチョーマの分布や来歴等を執筆することとした。

## 二 チョーマの分布

まず、図1を見ていただきたい。長野県は、地域の上で北信・東信・中信・南信の四つに分けるのが一般的である。小論でもこれに従う。この四つの地域、さらに主な地名を記したのが本図である。「千曲川」をチョーマと言うのは長野県のどの地域か。右に紹介した『ちようま』の第十号（一九八九）で、中村義松氏は『ちようま』ノスタルジア——「ちようま」語原考——の中で、次のよう

に述べている。

「ちようま」のドットマップは、未完成ですが、ドットが中の島（中洲）の多い箇所に集まって密度が濃く、河筋から遠のく程疎になる傾向が見られることである。このことは子供の遊びと深い関連を持つ。長野市の朝陽辺では三、四十才代の人も「ちようま」の語を知っており、そこは地図を見ると、島のつく地名の多いことに驚く。（中略）ドットの上限は上田あたりで、それより上流ではきかない。佐久にもないようである。（中略）

下流は調査不充分で解らないが、飯山地方にはない。足立惣蔵長野県の方言辞典）

この中で、チョーマが東信の上田あたりまでで、それより上流では聞かないとする情報は、貴重である。ただし、下流は調査が十分でないとしながら、「飯山地方にはない」とされるのは、いかがなものか。引用文末尾の括

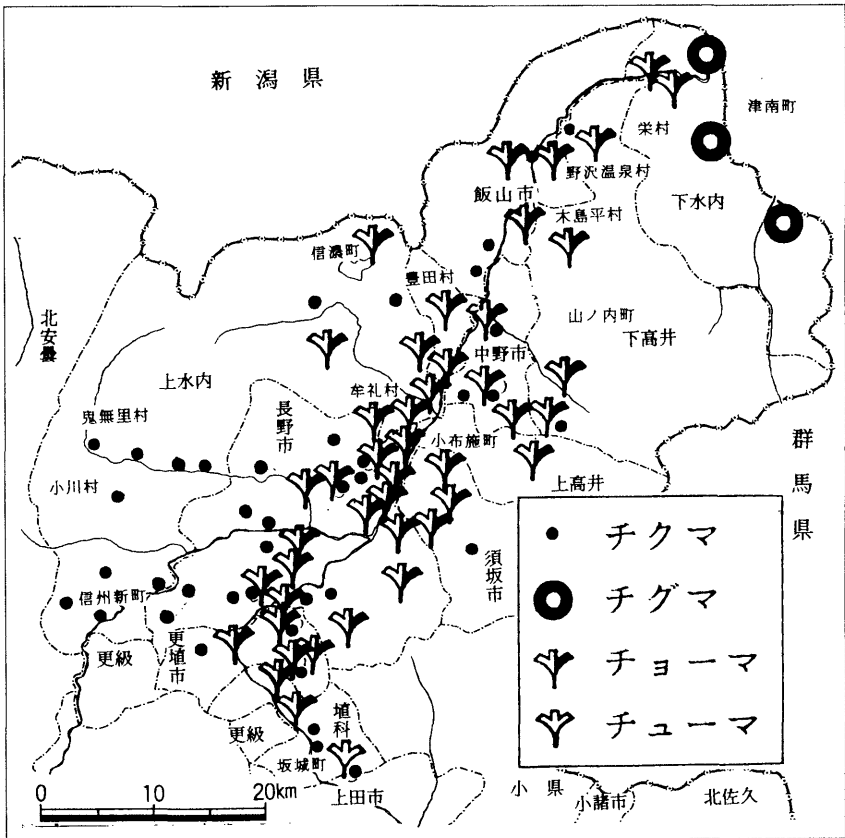


図2 「千曲川」の方言

弧内の記述からは、足立惣蔵氏の『長野県の方言辞典』には、「飯山地方にはチョーマは分布しない」と書かれているかのように受け取れるが、氏の著作に右の題名のものはないようである。似た書名のものに『信州方言辞典』(一九七八)があるが、同書には右のような記述は探したが見当たらない。

私は、かつて北信地方で学生とともに「千曲川」のことをどう呼ぶかを調査した<sup>①</sup>。その結果を地図としたものを図2として示す。

この図はいろいろな情報をわれわれに与える。

まず、チョーマは北信の千曲川流域に濃密に分布する。中村義松氏が「ない」とされた飯山地方にも分布する。チョーマは同地方のほか、周辺の中野市、山之内町、野沢温泉村、木島平村、豊田村などに満遍なく分布し、県境の栄村に及ぶ。だが、栄村の全域ではない。一方、北信の南縁部には一地点ながらチューマも認められる。

そして、チョーマは、鬼無里村、小川村、信州新町など千曲川から遠い地域では、北信であつても一般に用いられない。この点の中村義松氏の先の指摘のとおりである。ここはチクマである。もっとも信濃町古海のように、千曲川から離れてはいるが、チョーマを報告する地点にもあるにはある。

栄村の越後寄りの地域では、この川をチグマと呼ぶ。グはいわゆる鼻濁音を伴う「[ɲ]」ではなく、軟口蓋有声閉鎖音を伴う「[m]」で

ある。そして新潟県に入つて中魚沼郡津南町割野でもこの川はチグマである。新潟県に入ると信濃川というのは、地理学や学校教育の場でのことである。右に述べたことから分かるように、この地域では鼻濁音を欠いている。以下では、ガ行鼻濁音の音節、「[p̚], [t̚], [k̚], [p̚], [t̚], [k̚]」は、ガ・ギ・グ・ゲ…と表記し、非鼻音の音節、「[pa], [pi], [ku], [se]…」は、ガ・ギ・グ・ゲ…で表す。

なお、図2でチョーマとチクマと併存する地点は、チョーマを載せた。ついでに言々と、チクマガワという回答は極めて少なかった。これはチクマの中に入れた。話者のコメントからチョーマに関するものを拾うと、「古い言葉だ」「子供のころ使った」「水浴びに行く時はチョーマであつて、チクマとは言わなかった」など。

### 三 チョーマの語源(一)

「鉦(くわ)」という語をとる。この語を長崎県対島では、パー「[pa:]」と言う(『日本方言大辞典』下巻の「音韻総覧」による)。この語は一見、クワ「[kwa:]」という音形とは似ていないが、実は音韻変化の結果、クワ「[kwa:]」から生まれたものである。それは、 $kwa \rightarrow k̚wa$ 、 $\vee kwa$ 、 $\vee pa$  という過程をとつたのである。kwaのkwをみると、kは軟口蓋の閉鎖音、wは両唇の半母音である。両者が互いに影響しあつて、両唇閉鎖音pが生まれたのである。印欧祖語のk<sup>w</sup>がギリ

シヤ語でπで対応するなどは、これと同じ音韻変化である。

なぜこのような例を出したかと言えば、チヨーマという語も音韻変化を重ねてできあがったもので、その語源は「千曲」(Tsumura)という現代行われる音形とそれほど違わないものと見ているからである。

#### 四 チヨーマの語源(2)

では、チヨーマの前身は何であったか。

まず、チユーマと言われた段階が考えられる。長野県北信地方の固有の方言では、ユ・キュ・シユ・ジュ・チュ…などの音節と、ヨ・キヨ・シヨ・ジヨ・チヨ…などの音節とは、音韻的対立を持たなかった。後者に統合されていると言ってよい。例えば、次のように。

ヨ(湯) フヨ(冬) キョー(灸) オンナシヨ(女衆)  
 ジョオンサ(巡査) チョーニン(仲人) …

もつとも、これらの音節のヨ・キヨ・シヨ・ジヨ・チヨ…の母音は共通語よりも狭いということも注意しておかなければならない。だからこの地方では、「長治さん」の家を人に尋ねたら、「忠治さん」の家を教えられたという類の話は、以前はよく聞いた。「長治」も「忠治」も同じように発音され、区別がないからである。

北信地方のこの方言音韻の特徴を考えると、「千曲川」の方言チヨーマはチユーマから音韻変化した語形だと考える右の推定は、無理がない。北信最南端に一カ所チユーマのあることもこの推定を助ける。

では、このような音韻的特徴は、どこの方言と関係を持つか。『日本方言大辞典 下巻』の「音韻総覧」などを参照すると、近くは、新潟県——上越地方の一部と佐渡を除く——と北信と接する中信の北部地方がこの音韻的特徴を有する。越後から北信、そして中信北部にかけて、この方言的特徴を共有していることが分かる。

では、この特徴はいつごろから現れたものか。詳しいことは明らかでないが、江戸時代後期にはすでにそうであったと見られる。十返舎一九は『東海道中膝栗毛』(一八〇二〜〇九)の評判に気を良くして『統膝栗毛』の筆を執っている。この中の九編下冊「善光寺道中」(一八〇九)には、当時の善光寺界限の様子が生き生きと描かれ、その中には今問題になっている方言的特徴も載る。<sup>(2)</sup>

かくて善光寺の町にいたれば、とりどりの商家軒を並べ、繁昌いふばかりなく、両側のはたごやより、<sup>はた</sup>「ハイ尻垂屋じやう」<sup>しやう</sup>「十」兵衛でござります。とまつてござんしねへか(ト、このへんにては、十をじやうといひ、丈をじう、京をきう、久をきやうといひ、てうをちう、忠をてうといふ、ことばのまちがひ

あり)

右の文中の今問題になってゐる音韻の特徴について説明をしておこう。

まず、はたごやの呼び声「屁垂屋じやう」「十」兵衛の「じやう」について。漢字音の表記「じやう」「じよう」「せう」「せふ」は、この時代いずれもジョーと発音された。つまり、「十兵衛」を善光寺界限ではジョーペーと聞こえる発音をしていたのである。同じように卜書きの中にある「じう」はジュー、「きう」はキュー、「ちう」はチュー、「てう」はチョーの発音をそれぞれ表す。別の言葉でこの部分を簡単にまとめるならば、善光寺界限では、ジョーとジョー、キューとキョー、チューとチョーはそれぞれ反対に発音されるというのである。

このことは、これらの音声で、この時代、それぞれ、一つの音声になって音韻の対立を欠くようになり、その母音は才段音とウ段音のいわば中間またはそれに近い位置で発音されたのではないかという推定を可能とする。そこで「十」はジョーに聞こえ、逆に「丈」はジューとして聞き取られたのである。

「善光寺道中」のこのあたりには、右以外にも、この音韻的特徴があちこちに見られる。

やど「百五じやう」「十」文がじうね「定値」でござりいす。

「百五十文」をヒヤクゴジョーモン、「定値(じょうね)」(一)きまりの値段をジューネと言うというのである。

おや「ハイことして千じやう」「十」六年になりいす」

女「わしとこのばあさまがのへ、二じやう五のときうみしたげなで、ことしばあさまがちうどつこ、七じやう一になりす。あのお子は四じやう六とやらに、なりすと申いすのへ。」

右にあげた音韻の特徴の多くは、「十」をジョーと言うというものだが、「ちうどつこ」は、「丁度」に接尾辞「こ」が接続し、さらに促音化したチョードツコ(丁度っこ)をチュードツコと聞き取ったの表記である。

俳人一茶の『方言雑集』(一八二四年頃成立か)にも、幾つかこの特徴が見られる。

よ 湯也 しょびよく 首尾よく也 しょぜうな事をい

ふ

最後の例は、「種々」をシヨジョーと言っていたとするものである。これらの例は、この時代、ユ・シユ・ジュ…が一茶の生地、柏原(現、上水内郡信濃町)でヨ・シヨ・ジヨ…と混同されていたことを示すものである。もともと「し」の部には、「種々雑多」の例も載っており、「種々」を一方においてシジと発音したことを否定することもできない。

## 五 チョーマの語源 (3)

チョーマはチューマに由来する、それならばチューマは何かという問題になる。私はチューマはさらにチウマにさかのぼると考える。チウマからチューマへの音韻変化はごく普通である。日本語史もこの音韻変化を経験している。一般化すれば、 $Ci \rightarrow V \rightarrow Ci$  (Cは子音)である。例えば、「言う」をみよう。この場合、Cの部分 $\rightarrow 0$ となる。この語は、歴史的仮名遣は「言ふ」であるが、 $Fi \rightarrow V \rightarrow Fi$ の音韻変化のあと、中世末には $Fi$ となっていた。キリシタン資料『日葡辞書』(一六〇三)には次のように載る。<sup>(4)</sup>

Fi, yu, yuta, イイ, ユウ, ユウタ 話す、あるいは、言う

また、「宇宙」の「宙」は、漢字音「チウ」として日本語に取り入れられたが、同書には次のように載る。

Vau, uチユウ (宇宙) すなわち、Tenchino ai. (天地の間) 天と地との間、すなわち、空中。文章語。

これで、チューマの前段階として、チウマを想定することは、全く無理のないことが分かる。

## 六 チョーマの語源 (4)

それではチウマの前は何であったか。私はチグマ [ʧiguma] を

考えたい。これを見て、千曲川下流域越後境の地域で、「千曲川」がチグマであったことを思い起こされた方も多いにちがいない。しかし、このチグマは、前にも触れたように、「ʧiguma」である。つまり、グの子音は「 $\beta$ 」であって「 $\beta$ 」ではない。「 $\beta$ 」は軟口蓋鼻音で、軟口蓋有聲閉鎖音「 $\beta$ 」とは異なる。繰り返すと、チウマの前の段階はチグマ [ʧiguma]、そして千曲川下流域、栄村の越後寄りの地域はチグマ [ʧiguma] で、この二つはこの段階では区別して考えなければならない。

では、チグマ [ʧiguma] の「 $\beta$ 」はチョーマ地域で脱落したという証拠はあるのかという問題が次に起こる。

そこで飯山市富倉方言を例にとる。富倉は信州側飯山と越後側の高田、直江津を結ぶ中継地で、古くから信越の交通交易に重要な役割を果たしてきた。その高年齢の方言から幾つかを拾う。

ノウ (脱ぐ)                      タマエタ (たまげた)  
スーニ (すぐに)                  ショート (仕事)

カーミ (鏡)                        モーサ (もぐさ)  
モーラモチ (モグラ)              ミーッカ (右側)

いずれの語においても「 $\beta$ 」の脱落していることが分かる。こうした音韻の特徴は富倉方言に限らず、飯山地方一帯の方言に極めて著しい。

三石泰子（一九七六）は、飯山地方での「 $\text{ɛ}$ 」が脱落する過程として、 $\text{ɛ} \vee \vee \vee \vee \vee \vee$ を推定しているが、これは音韻変化としては自然で一般的なものである。同論文には、飯山地方における $\vee$ の語例とその地点も上がっている。詳しくは同論文を参照されたい。

そしてガ行鼻音「 $\text{ɛ}$ 」の脱落は、例えば「つぐら（嬰兒籠）」におけるツグラに対するツーラのように、飯山市を中心とする比較的狭い地域に限られるものから、「かわいそうだ」におけるムゴイ系のモーラシイ、モエツケネのように、栄村を除く北信全域から中信松本平というように、かなり広い地域に広がるものまで、語による差は顕著である。だが、いずれにしても、チョーマ地帯は、濃淡の差はあるが、ガ行鼻音の脱落の見られること、さらに栄村の越後寄りの「 $\text{ɛ}$ 」地域では、かかる脱落は原則として認められないことは、注目に値する。

以上をまとめると、次のようになる。

「千曲川」の名称は、北信の「 $\text{ɛ}$ 」地帯では「 $\text{ɛ}$ 」の脱落現象が起（こ）り、チグマ [ʧiɡuma] からチウマ [ʧiɯma]、さらにチユーマ [ʧiɯma] を経（た）つて、チョーマ [ʧoɾma] となった。それに対し、チグマ [ʧiɡuma] 地帯では「 $\text{ɛ}$ 」は脱落しなかったために、かかる音韻変化を（こ）むることはなかった。

## 七 チョーマの語源（5）

さて前節までで「千曲川」の方言、チョーマがチグマ [ʧiɡuma] にさかのぼることを述べ、さらに千曲川の下流域栄村の越後寄りの地域は、チグマ [ʧiɡuma] であることも述べた。では、さらにさかのぼると、この地方で「千曲川」の名称はどうなるのか。

『万葉集』巻十四には、奈良時代の東国の歌が収められているが、その中に次の歌が載る。

信濃なる知具麻能河泊のさざれしも君し踏みては玉と拾はむ  
（三四〇〇）

歌の意味を日本古典文学全集『万葉集三』（小学館、一九七三）に  
より紹介する。

信濃の千曲ちまの川の小石でも君が踏んだら玉として拾おう。

さて、「知具麻能河泊」はチグマノカハであり、「具」は濁音節グの仮名である。「ク」のように清音であるならば、「久」「九」「口」「苦」などの仮名を用いなければならない。そして「知具麻能河泊」は、この時代には [ʧiːɡumanokata] のように発音されたと推定される。今、[ʧiːɡuma] をとるならば、これがチグマ [ʧiɡuma] とチグマ [ʧiɡuma] の共通の祖形だと考える。「 $\text{ɛ}$ 」は一方では「 $\text{ɛ}$ 」、他方では「 $\text{ɛ}$ 」へと音韻変化したのである。



## 八 チョーマの語源(6)

では、どうして「 $\text{t}^{\text{h}}\text{e}$ 」は、「 $\text{t}^{\text{h}}\text{u}$ 」と「 $\text{t}^{\text{h}}\text{u}$ 」に分かれたのか。室町時代末、京都語では語中のバ行、ダ行、ガ行子音は、それぞれ、「 $\text{t}^{\text{h}}\text{p}$ 」<sup>(8)</sup>、「 $\text{t}^{\text{h}}\text{b}$ 」<sup>(8)</sup>、「 $\text{t}^{\text{h}}\text{d}$ 」であつたことが、キリシタン資料から知られる。例えば、コリヤード『日本文典』(一六三三)には次のような例が現れている。コリヤード原著、大塚高信訳(一九五七)による。

yocobi (喜ぶ)    codomo (子供)    vonago (女子)

だが、この時代、ダ行・ガ行子音は語頭以外で、それぞれ、「 $\text{t}^{\text{h}}\text{p}$ 」、「 $\text{t}^{\text{h}}\text{b}$ 」であつたが、バ行子音が語頭以外で「 $\text{t}^{\text{h}}\text{p}$ 」となるのは、特種な場合に限られていたとする記述もある。ロドリゲス『日本文典』(二六〇四〜〇八)は次のように述べている。ロドリゲス原著、土井忠生訳(一九五五)による。

○D、Dz、Gの前のあらゆる母音は、常に半分の鼻音かソノソネーテかを伴つてゐるやうに発音される。(略)

○この法則は、ある場合にBの前の母音Aを支配することがある。それはMaiti sorotaba (参りそろはば)のやうに、主としてFが重複して、そのFがBに変る場合であるが、一般的なものではない。

この記述によると、この時代、閉鎖音系列ダ行・ガ行の語中子音は、「 $\text{t}^{\text{h}}\text{p}$ 」、「 $\text{t}^{\text{h}}\text{b}$ 」であつたが、「 $\text{t}^{\text{h}}\text{p}$ 」は限られた音環境にしか認められなくなつてゐることが分かる。つまり、「 $\text{t}^{\text{h}}\text{p}$ 」がかなり進んでゐると見られる。そしてこれに続いて、「 $\text{t}^{\text{h}}\text{p}$ 」も起り、「 $\text{t}^{\text{h}}\text{p}$ 」もそのあとを追おうとしたにちがいない。そして事実「 $\text{t}^{\text{h}}\text{p}$ 」となつた地域も、この時代に存在したことが、ロドリゲス原著、土井忠生訳(一九五五)の記述から分かる。

○gの前の母音は半分の鼻音を以て発音するのであるが、「備前」(Bijé)のものの発音ではそれを除いてゐて、干からびた発音をする。例へば、「 $\text{t}^{\text{h}}\text{oga}$ 」(科)の代りに「 $\text{t}^{\text{h}}\text{oga}$ 」(とが)、「 $\text{t}^{\text{h}}\text{oregani}$ 」(某)などといふ。この発音をするので「備前」(Bijen)の者は有名である。

では、なぜ「 $\text{t}^{\text{h}}\text{p}$ 」、「 $\text{t}^{\text{h}}\text{b}$ 」が鼻音要素を失つて多くの地域で、それぞれ、「 $\text{t}^{\text{h}}\text{p}$ 」、「 $\text{t}^{\text{h}}\text{b}$ 」となつたのに対し、「 $\text{t}^{\text{h}}\text{p}$ 」ではかなり多くの地域で「 $\text{t}^{\text{h}}\text{p}$ 」となる道をとつたのか。そこには二つの理由があつたと考える。

第一の理由は、日本語の鼻音系列で、両唇鼻音m、歯茎鼻音nは存在していたのに対し、軟口蓋鼻音ŋは存在せず、そこはいわば「あきま」になつてゐたからである。そこで、「 $\text{t}^{\text{h}}\text{p}$ 」は、かなり広い地域で、「 $\text{t}^{\text{h}}\text{p}$ 」、「 $\text{t}^{\text{h}}\text{b}$ 」の場合とは異なり、鼻音と軟口蓋音の特徴を満足

させる $\text{u}$ を採用したのである。

だが、このほかに $\text{u}$ が $\text{u}$ となる第二の契機がありはしなかったかと思う。ここで語中のカ行子音、同じくガ行子音の分布を見よう。例えば、『日本方言大辞典 下巻』の「音韻総覧」所載の8「カ行子音（非語頭）」と10「ガ行子音（語頭）／「非語頭）」を見ると、そこには次のような特徴が認められる。

カ行子音の有声化地域には、ガ行子音は語頭以外の位置で $\text{[g]}$ をとる場合が極めて多く、そうでない場合は $\text{[g]}$ をとるなどして、 $\text{[g]}$ をとる地域は極めて狭い。

この現象をどう捉えるか。私は次のように考えたらどうかと思う。カ行子音が語中で有声化している地域では、 $\text{[g]}$ が $\text{[k]}$ になろうとした場合、そこにはすでに $\text{[k]}$ の有声化によって生じた $\text{[g]}$ が存在する。そこで「あきま」である $\text{[g]}$ に、身を寄せたのである。

しかし、 $\text{[g]}$ は $\text{[u]}$ となることにより、 $\text{[g]}$ 、 $\text{[k]}$ から生まれたい、 $\text{[u]}$ との間に、体系的不均衡を招来することとなった。そこで $\text{[v]}$ という非鼻音化現象は、その不均衡を解消し、体系的を取り戻す行為でもあったのである。

それは現代日本語で語中カ行子音の有声化が認められない地域では、テレビの影響もあって速やかに行われている。それに対し、

カ行子音の有声化の認められる地域、例えば東北地方で、ガ行鼻音が若い世代でも比較的よく行われているというのは、それが語中カ行子音の有声化地域だからである。したがってこの地域でガ行非鼻音化が進むための条件は、語中カ行子音の $\text{[v]}$ の地均しが必要だということになる。

論述は、チョーマの語源に関わりながらガ行鼻音の成立の問題へと入っている。それについては二つの契機があったことを述べ、詳しくは稿を改めることとし、話を本題に戻し、まとめておく。

なぜ、知具麻 $[\text{si}^h \text{guma}]$ の $\text{[g]}$ は、栄村越後寄りの地域では鼻音要素を落として $\text{[g]}$ となり、他の地域は軟口蓋鼻音 $\text{[g]}$ となったのか。北信飯山市を中心とする一帯は、右の地域を除くとかなり広い地域でカ行子音は語中では有声化して $\text{[g]}$ となることが多い。そこで、すでに述べたように、同地域では $\text{[g]}$ が $\text{[g]}$ となることは難しく、あきまに入る音声 $\text{[g]}$ を採用した。この音声は軟口蓋音であり鼻音であるため $\text{[g]}$ とも $\text{[g]}$ とも音声的特徴を共有していた点も採用の理由にあげられる。

それに対して栄村の越後寄りの地域は、カ行子音の有声化は原則として起こらない。私の観察しえたのは、 $[\text{e} \text{su}]$ （行く）の一語にとどまる。そこで $\text{[g]}$ は $\text{[g]}$ となることができたのである。

なお、「知具麻」の語源については触れることがなかったが、「千・

限」、つまり「屈曲の多い(川)」という説を採る。「千曲川」の「千曲」(Ikuma)についても同じように考え、両者の違いは、連濁の有無によるものとする。『万葉集』では、「水隈」は「水具麻」(巻十一、二八三七)と連濁し、「百隈」は「毛毛久麻」(巻二十、四三四九)で連濁しない。前接する語との熟合の度合いなどが関係していよう。

### 九(付)「中麻奈」について

最後にこの歌の次の歌(巻十四、三四〇一)における「中麻奈」の訓みとその意味について、ごく簡単に述べて小稿を終えることにしたい。まず、日本古典文学全集『万葉集三』を参照して歌をあげ

中麻奈に浮きをる舟の漕ぎ出なば会ふことかたしけふに  
しあ  
らねば

歌の大意は、前掲書によって紹介すると、「中麻奈に浮いている舟が漕ぎ出して行ったならば、逢えなくなろう。今日でなければ」である。さて、万葉仮名で書かれた「中麻奈」をどのように訓み、どのような意味を与えるかについては、いまだ定説というべきものはない。

古来、「中麻奈」はナカマナと訓まれて来た。これに異説を唱え

たのは都竹通年雄(一九五三)で、これをチグマナと訓む新説を提出した。

都竹論文は「中麻奈」の「中」を、ナカと訓む根拠のないことを述べ、奈良時代この字音が $\text{mj}$ である可能性が高いとして、これをチグに当てたものと推定し、次のように述べる。

中麻奈はチグマナと読むべきであつて千曲川の事であり、このナはアイヌ語の川という意味の語根が地名に残つたものであらう。

私は、右の前半部分は卓見として賛成したい。後半部分は見解を異にする。ナは奈良時代、接尾語として次のように用いられた。

人を表わす語に付いて、親愛の意を含めるのに用いる。「せな」「いもなる」など。

おもに時を表わす体言を並列して、それぞれの下に付けて用いる。「朝な朝な」「朝なさな」「朝な夕な」など。(下略)(以上『日本国語大辞典』による)

接尾語「な」が「人」を表す語、「時」を表す語に付くことの多いことは確かである。だが、奈良時代東国方言で、接尾語「ろ」が、「背ろ」「妹ろ」のように「人」を表す語に付くほか、「夜ろ」「馬來田の嶺ろ」などにおけるように、種々の語に付いたことを考えると、「な」もこのように地名に接続しえて、千曲川に対する親愛の気持

を表したのではないか。「草かげの安努奈行かむと」(巻十四、三四七)の「安努奈」の「奈」なども、同じように考えられると思う。

「中麻奈」の訓みとその意味とについて、私の考えを手短かに述べた。

## 十 おわりに

以上、長野県北信地方における「千曲川」の方言、チョーマを取り上げ、その分布と語の来歴を述べた。後者ではその音韻変化の過程を現代から過去へとさかのぼり、それが『万葉集』巻十四東歌に載る「知具麻」[c<sub>1</sub>ːs<sub>1</sub>uma]に由来することを述べ、同時に現在、千曲川下流域域栄村の越後寄りの地帯に見られるチダマ [tɕiːma] は、その入りわたり鼻音の脱落した語形であること述べた。そして(付)として、『万葉集』巻十四、三四〇一の「中麻奈」を取り上げ、その訓みと意味について触れた。

注(1) 調査地点数八一地点、調査者信州大学教育学部学生及び馬瀬、調査年一九八一年。

(2) 引用は、名著全集『統膝栗毛 下』(一九二七)による。なお、「十」は本文の左に置かれていたが、印刷の便を考え、本稿のような処理をした。あとに出る「定値」も同じである。

(3) 引用は、信濃教育会編、一茶叢書第二編『方言雑集』(古今書院、

一九二六)による。

(4) 引用は、土井忠生ほか編訳『邦訳日葡辞書』(岩波書店、一九八〇)による。

(5) 「むごらしい」の変形。

(6) この語と関係があると考えられる語に「むごつけない」「むげちない」がある。前者は『日本国語大辞典』には次のように載る。

「むげちない」に同じ。\*浄瑠璃・出世握虎雑物語―「むごつけないこと見に斗お供はせぬ」(下略)

(7) ムゴイ系について言えば、東信、南信そして中信北部では一般に[c<sub>1</sub>]は脱落しない。中信南部木曾地方はカワイサイ系が分布し、この現象とは無関係である。

(8) ダ行の場合、チ・ヅにあたる子音は入りわたり母音を伴った有声破壊音であったが、ここでは「tɕ」の中に含めて扱った。以下も同様である。

## 参考文献

- 足立惣蔵(一九七八)『信州方言辞典』遠兵バブリコ  
 小島憲之・木村正俊・佐竹昭広校注・訳(一九五三)『日本古典文学全集 万葉集三』小学館  
 信濃教育会編(一九二六)一茶叢書第二編『方言雑集』古今書院  
 コリヤード原著、大塚高信訳(一九五七)『コリヤード日本文典』風間書房  
 新村出編(一九九八)『広辞苑 第五版』岩波書店  
 都竹通年雄(一九五三)『巻十四の「中麻奈」』『万葉』九号  
 土井忠生ほか編訳(一九八〇)『邦訳日葡辞書』岩波書店  
 中村義松(一九八九)『ちようま』ノスタルジア―「ちようま」語原考

『ちようま』十号

徳川宗賢監修（一九八九）『日本方言大辞典』小学館

日本大辞典刊行会編（一九七二〜七六）『日本国語大辞典』小学館

三石泰子（一九七六）「母音間のガ行鼻音の脱落現象―長野県飯山市の場

合―」『都大論究』13

名著刊行会（一九二七）日本名著全集『続藤栗毛』

ロドリゲス原著、土井忠生訳（一九七五）『ロドリゲス日本大文典』三省堂

〔後記〕 フェリス国文学会の『玉藻 福田準之輔先生御退職記念

号』に執筆の機会を与えられたことを感謝する。学生諸君に

も読んでもらえるよう分かりやすく書くことに努めたが、文

が冗漫に流れたことをおそれる。

福田準之輔先生にはいよいよおすこやかであられ、研究に

教育にご活躍なされるよう心よりお祈り申しあげる。

（信州大学名誉教授）